

## 不正行為に対する教員および学生の認識の変化 Teacher and Student Attitudes towards Academic Misconduct

\*Ruth Vanbaelen<sup>1</sup>, Jonathan Harrison<sup>1</sup>

Abstract: This report discusses the attitudes of English Communication (EC) teachers and students towards academic misconduct, with a focus on plagiarism. Copying and pasting without proper referencing of the source text is a recurrent issue in EC classes, even for low-stake assignments. A survey among students indicates insufficient know-how on citation and referencing. Communication between teachers and students reveals an increasingly positive attitude towards wanting to learn and adhere to the rules of good academic practice.

### 1. はじめに

学界において利害関係が高い (high stakes) 研究における不正行為 (データの改ざんや論文の盗作・剽窃など) が頻繁にメディアに取り上げられるようになってきている。利害関係がそれほど高くない (low stakes) といえる授業のレポートや課題でも、一部の学生がネットなどから引用する場合に出典を明記せず、コピーアンドペースト (以下コピペ) を行っているのが現実である。その一方、引用などの正しい書き方が分からないと悲鳴を上げる学生も数多くいる。本研究は盗作・剽窃に焦点を当て、過去 6 年間に English Communication (EC) 科目で取り組んできた対策、および教員と受講者の盗作・剽窃問題に対する認識の変化に関して報告する。同時に、この問題に関するコミュニケーションの重要性をも指摘したい。本報告の一部は IEEE-IPCC2013 に発表されたものに基づく<sup>[1]</sup>。

### 2. 方法

本研究のデータは質問紙調査の結果および教員と EC 受講者との口頭コミュニケーションに基づく。学生が盗作・剽窃に対してどのような認識を持っているかを調査することを目的として、2013 年 1 月に EC 受講者にメールで質問紙調査を送付した。①課題に必要とされるデータの収集方法とその扱い方、②引用に関する学習、③盗作・剽窃に関する学習と認識、が調査の主な内容であった (質問紙調査の詳細に関しては筆者に連絡されたい)。口頭コミュニケーションとは主に盗作・剽窃が発覚した受講者と教員とのコミュニケーションであり、場合によってはクラス全員と教員とのコミュニケーションを指す。

### 3. 結果と考察

#### 3. 1 質問紙調査：盗作・剽窃に対する認識

質問紙調査は日本語で用意され、参加が自由で科目の成績への影響がないことを明確したうえで、EC 受講者 105 名にメールで送付され、41 名 (男 34 名、女 7 名) から回答を得た。

盗作・剽窃という行為はデータ収集方法と強くつながっていると考えられる。例えば、ネットから得られたデータを適切に引用せず利用したと認める大学生が 1999 年から 5 年の間 13% から 41% に増加した報告<sup>[2]</sup>がある。本研究では EC 受講者がどのようにデータを収集し利用するか調査した (複数回答可) ところ、93% (38 人) がネットを、49% (20 人) が図書館を、36.5% (15 人) が専門書を利用するという結果になった。参考したデータのコピペを全く行わない受講者は 31% (13 人) で、彼らは内容を自らの言葉に書き換えたり、和訳したりするという。また、全体の 7 割近く (68%、28 人) がコピペを行い、そのうち 64% (18 人) が必ず引用をするか参考文献を表示すると回答した。しかし、3 割以上 (35.7%、10 人) がそういった適切な処置を取っていないと認めた。この結果は McCabe (p6, Table 4)<sup>[3]</sup>が指摘する 38% に類似するものである。しかし、コピペを行わないという受講者も無意識に盗作・剽窃を行う危険性がある。参考文献を十分に表示しなかったり、部分書き換え (Patchwriting) や和訳した部分を自らの考えであるかのように使用したりするからだ。このような問題は盗作・剽窃や引用のルールの学習と関連しているため、次に受講者による引用ルール学習について記述する。

参加者の大半 (65.9%、27 人) は引用や参考文献の書き方について高等学校 (25.9%、7 人) や大学 1 年次 (70.4%、

1 : 日大理工・教員・一般

19 人) の時に学習している。引用を明記しない参加者 10 人のうち、6 人はルールを学習しておらず、4 人は引用等が必要だと認めるものの、やり方が分からなかったり、面倒だと感じたりして使わないと回答した。引用や参考文献の書き方について学習経験がある 27 人中 14 人のみが盗作・剽窃について学習経験があった。その 14 人の大半 (85.7%、12 人) は盗作・剽窃が不正行為だと回答した。しかし、引用の書き方をまたは盗作・剽窃について学習していない場合、盗作・剽窃が不正行為ではないと回答する参加者は 1/3 まで上る。この結果は不正行為を避ける認識を高めるためには引用・参考文献のルールと盗作・剽窃について合わせて学習することの必要性を指し示す。

### 3. 2 口頭コミュニケーション

筆者は 2009 年度から EC 科目を担当して、盗作・剽窃のような不正行為を見てきた。当該学生を叱り、受講者全員にコピペが英語の上達とつながらないと説明してきた。当初、不正行為を起こした学生もその他の学生も「ただの英語課題で、別にいいんじゃない」のような無関心な反応が多かった。それはおそらく受講者がルールを把握していると教員が思い込み、コピペがなぜ不正行為であることを説明してこなかったからだと考える。学生がコピペが不正行為だと把握しないことが質問紙調査で得られたコメントからも明らかになっている。参加者 R26 は「引用することによって、より良い言い回しを身につけることができる」とコメントしているが、この学生は授業の課題で繰り返しに出典を書かずにコピペを行った学生である。ここから、R26 が「引用」と「出典を明記せず、原文からのコピペを自らの言葉・考えとして扱う」を同じものとして捉えていると解釈ができる。

上記を受けて、筆者は授業中に、「他人が書いたものをそのままコピペすることは、その筆者の努力を無視することであり、不正行為に当たる」などと説明して、引用と参考文献の重要性を取り上げている。また、参考文献が明記されていても、引用ばかりからできている課題の問題点、要するに自らの考えを記述することの必要性についても触れている。さらに、2014 年度からシラバスに不正行為が発覚した場合、その課題に点数がつかないと記載し、ガイダンス時にはそのことに触れ、盗作・剽窃が行われる可能性が少しでもある課題ごとに改めて授業中に何が問題なのかを説明している。それでもコピペを含んだ課題の提出がある。各自に理由を求めると、多くの学生は R26 と同じ考えであったり、まだ十分にルールを適応できていないことが分かる。授業中で時間も限られているため、ルールの説明のほかに別の対策および工夫を試みている。主なコピペ軽減対策としては、課題への工夫が挙げられる<sup>[4]</sup>。例えば、より身近なテーマで書かせて学生の負担を軽減させたり、利害関係がより高い課題の場合、時間をかけて教員からのフィードバックを与えながら、段階的に課題を提出させるなどの取り組みを行っている。

### 4. まとめ

質問紙調査の結果から、ネットが主なデータ収集方法となり、調査参加者の多くがコピペを行い、不正行為への危険性が高いことが判明した。さらに、引用のやり方、または盗作・剽窃の内容のどちらかを学習していない場合、盗作・剽窃が不正行為ではないと認識している参加者が 1/3 に上る。ルールおよび内容を両方学習する必要性を指摘できる。

EC 科目は書くことだけに焦点を当てる科目ではない。よって、必ずしも不正行為の内容や引用の書き方について取り上げる十分な時間があるとは限らない。しかし、「不正行為とは何なのか、そしてどう防ぐことができるのか」を授業中に触れることによって、受講者の関心を高めることができたと考えられる。今後もさらなる工夫が必要であるが、学生の負担を軽減するために課題内容を再考することや、教員からのフィードバックというコミュニケーション方法が有利であると考えられる。

### 5. 参考文献

- [1] R. Vanbaelen & J. Harrison: "Plagiarism Awareness" *IEEE-IPCC 2013 Proceedings*, CD-ROM、計 8 頁、2013.
- [2] D. L. McCabe: "Promoting academic integrity: A US/Canadian perspective" *The proceedings of the Australian Educational Integrity Conference*, University of South Australia, pp. 3–12., 2004.
- [3] D. L. McCabe, "Cheating among college and university students: A North American perspective," *International Journal for Educational Integrity* Vol. 1, No. 1, pp. 1–11, 2005. [Online]: <http://www.ojs.unisa.edu.au/index.php/IJEI/article/viewFile/14/9>.
- [4] N. C. Heckler, D. R. Forde and C. Hobson Bryan, "Using Writing Assignment Designs to Mitigate Plagiarism," *Teaching Sociology*, 2013, Vol. 41, No1, pp. 94–105, originally published online 18 September 2012, <http://tso.sagepub.com/content/41/1/94>.